インテグリティ（Integrity）

（著者注釈：2022 年 3 月に研究者のテキストプラットフォーム Cunugi（現在はサイト閉鎖）で公開された記事「インテグリティ」を改訂したものです。道徳哲学におけるインテグリティ概念を概説した記事です。2024 年 2 月 14 日更新。）

ふつうに考えれば、やめた方が良いのかもしれない。ほかの人ならやめておくだろう。それでも、どうしてもしなければいけないことがある。ひとは、ときに、このように考えてほかの人ができないことをする。ナチス政権を批判する葉書を街にばら撒きつづけ、処刑されたハンペル夫妻。家族を捨ててでも「人形の家」を出る女性、ノーラ。王の馬に体当たりしたサフラジェット、エミリー・デイヴィソン。歴史・フィクション問わず、多くの人物がそのようにじぶんを貫いてきた。英語では、彼ら彼女らについて「インテグリティ（integrity）がある」と言う。インテグリティとは、辞書的にいえば「全一的な状態、内的な統一が保たれた状態（the state of being whole and undivided）」のことである。ひとりの人間として一貫性や統一があること、外的な要因や強制に流されずに、そのひとらしさが発揮されていることを示す概念である。

本稿では、このような意味でのインテグリティが倫理学において持つ重要性について概観する。具体的には、インテグリティを考えることで功利主義を批判したバーナード・ウィリアムズの議論を中心に、インテグリティが、「ひとは X すべし」という一般的観点に立つ倫理学理論の枠組みを揺さぶることを見ていく。まず、第一節でインテグリティの概念を整理・分析する。第二節では、ウィリアムズの議論を紹介し、その眼目を検討する。第三節では、功利主義・倫理学理論による反論を紹介した上で、インテグリティ概念のさらなる展開を目指す。最後に第四節として文献案内を付す。

1. インテグリティの概念

まず、非英語話者にとって馴染みの薄い「インテグリティ」の概念を概観しておこう。インテグリティのある人として典型的にイメージされるのは、誘惑や脅迫をはねのけて自らの信条を守る人々である。ある種の統一性や一貫性を示す彼女らは、賞賛に値する人物とみなされ、「強い意志のある人」と呼ばれたりする。

とはいえ、インテグリティは単なる一貫性というわけでもない。そのことを見とおすために、四人の人物を考えてみよう。一人目は、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』のソクラテスである。彼は、自らにとって謂れのない告発を認めなかったために死刑宣告を受け、逃亡の誘いを受けながらそれに乗らず、死刑を受け入れる。二人目は、『月と六ペンス』に登場する芸術家ストリックランドである。彼は安定した仕事を突然辞めて、家族すら捨てて、一文無しで絵を描き始めて周囲を驚愕させる作品を創り出す。彼に道徳や愛を説いてもびくともしない、曰く「描かなくてはいけない」。三人目は、カフカの短編『流

刑地にて』に出てくる将校である。処刑執行官である彼は、処刑の理由は全く説明できないものの、処刑の正義を信じつづける。旅行者がその非人道性を告発すると言うと、自ら処刑機械に身を投じて処刑される。四人目は、「気取らない」人物であるとみなされようと意図的に「気取らなさ」を振る舞いつづける作家スタンダールである。さて、これらのうち、インテグリティがあると言えるのは誰だろうか。

ソクラテスやストリックランドは、インテグリティがあると言えるだろう。ストリックランドは反道徳的かもしれないが、厳しい状況にあっても芸術作品を創るその生き様は強烈な一貫性を示しているように思われる。しかし、将校やスタンダールについては論争的である。スタンダールは、「気取らなさ」を意図的にもたらすというその生き方の矛盾を措くにしても[1]、一貫性があるというにはあまりにも自惚れや自覚が強すぎるように思われる。それは自然に生じる一貫性ではなく、装われた一貫性である。将校は、スタンダールのような装いはないものの、その一貫性は周囲には理解しがたい。それは「盲信」のようなものではあって、一貫性を支える何かが欠けているように思われるのである。

このように素描されるインテグリティについて、以下のような性質が指摘されてきた（Scherkoske 2013a: 29）。

（1）理由のある確信：インテグリティは、個人の確信と関わる。インテグリティのある個人は、その確信の強さによって、誘惑や脅しに屈しない。さらに、その強い確信は、何らかの理由に基づくものであり、単純な盲信やわがままではない。

（2）真摯さ・誠実さ（truthfulness）：インテグリティのある個人は、自己欺瞞、虚栄、自惚れから自らの確信を固守するのではなく、真摯かつ誠実にその態度を取っている。

（3）一貫性・統一性：インテグリティのある個人は、確信・行為において何らかの一貫性・統一性を示す。その場その場で都合よく態度を変える人はインテグリティを示していない。

つまり、何らかの理由に基づいて、誠実に、自らにとって大事な価値をつらぬく態度にこそ、インテグリティが現れる。ソクラテスは、哲学的な説明が可能であるような、理由のある確信に基づいて、誠実に自らの無実を主張し、その主張・態度には一貫性が伴っている。ストリックランドは、反道徳的であるものの、その振る舞いは芸術的創造への誠実な希求に溢れており、インテグリティを示しているように思われる。自覚的に気取らない態度を装うスタンダールには真摯さや誠実さが根本的に欠けている。流刑地の将校は、その

[1] これはヤン・エルスターが「本質的に副産物である状態（States that are essentially by-products）において論じる矛盾の典型的なものである（エルスター 2018:70-1）。つまり、「気取らない態度」という本質的に副産物である状態でしかない状態を、意図的にもたらそうとすることによって矛盾が生じている。「気取らない」ことは、それを自覚的にもたらそうとするかぎり決してもたらすことができない。

振る舞いにおいて一貫性があるものの、理由の存在や誠実さの点で欠けている。インテグリティに現れるこれらの諸性質はどれも論争的なものであって、その基準を明確に定めることはできないかもしれないが、こうした諸性質を考えることによって、インテグリティをそうでないものから区別することができる。インテグリティ概念の性質や広がりについては、また本稿の最後で立ち戻ろう。

このような諸性質を持つインテグリティには、さらにいくつかの関連するポイントがある。第一に、インテグリティは、個人のありようを表現するものである。自らの偽らざる確信を固守するとき、個人はその特別なひととなりや性格を表現するからである。ソクラテスの振る舞いは、哲学的な吟味を重視する性格を表しているし、ストリックランドの生は、彼の破壊的なまでの創造性を表現している。第二に、インテグリティは、それに対抗する力がある時に典型的に現れる。ソクラテスにおける脱獄、ストリックランドにおける安定した生活——つうじょうひとを動かすような力に対抗するからこそ、インテグリティが現れる。誘惑や強制に負けずにつらぬくという態度にこそ真摯さや一貫性が現れる。

2. インテグリティと倫理学

2. 1 ふたつの事例

さて、インテグリティは、どうして倫理学にとって重要な概念とみなされるのか。これを考えるためには、倫理学において正面からインテグリティを論じた哲学者であるバーナード・ウィリアムズの議論をみておく必要がある。ウィリアムズは、「功利主義批判」（『功利主義論争（*Utilitarianism: For and Against*）』所収）において、以下の二つの事例を提起した（Williams 1973: 97–99）[2]。

科学者ジョージ

ジョージは無職の化学者であり、家族は厳しい経済状況にある。彼は、巨額の生物兵器開発のプロジェクトに誘われることになった。彼は軍事研究に強く反対しており、それへの反対運動にコミットしてきた。参加すれば給与で家族を支えることができる。参加しなければ、彼の代わりに、より熱心に開発を行う研究者がその仕事に就く。ジョージもそのことを知っている。

探検者ジム

ジムは外国での植物調査中に現地の民兵組織に捕まった。彼の隣には、20 人の住民がいる。彼らは無作為に選ばれた住民であり、反政府運動弾圧の見せしめのために処刑される。だが指揮官は、ジムに「外国からの客人としての名誉」を与えると言う。ジムに住民一人を処刑する機会を与え、特別な「名誉」のしるしに、他の住民は解放す

[2] わかりやすさのために、元の事例に少しアレンジを加えてある。

ると言う。断れば通常通りの処刑がされる。

二つの事例はどちらも、以下のような構造になっている。行為者にとって倫理的に受け入れがたい行為が行われることで、望ましい帰結がもたらされる。たほう、それをしない場合、望ましくない帰結がもたらされてしまう。

二つの事例において、ジョージ・ジムはいかに行為すべきか？この選択について、倫理学はどう考えるのか。ここで、功利主義の枠組みにしたがって思考するかぎり答えは明らかである、とウィリアムズは言う（Williams 1973: 99）。功利主義とは、一般的には「最大多数の最大幸福」というスローガンにおいて知られる倫理学理論であり、それによれば、正しい行為とは、その帰結による善が最大のものである[3]。つまり、それをすることで最も幸福な結果がもたらされるとき、その行為は正しい。功利主義にしたがえば、明らかに、ジョージは仕事を受けるべきだし、ジムは一人を殺すべきである。ジムのケースでは一人殺す場合の帰結の望ましさが明白であるし、ジョージのケースでも、いずれにせよ軍事研究がなされるのであれば、参加して給与をもらいつつ、適切にサボタージュするのが最善の帰結をもたらすだろう。ウィリアムズは、しかし、これらが明らかに正しい答えなのか、そのように言い切ってしまう功利主義の歯切れの良さには何か問題があるのではないか、と問うのである。

2. 2 インテグリティによる批判

ウィリアムズの批判の要点は、功利主義的にふたつの事例を考えるかぎり、行為者のインテグリティがじゅうぶんに考慮されておらず、そこに功利主義の視点の単純さが表れている、というものである（Williams 1973: 78, 99–100）。功利主義は、関係者の功利の最大化を考えるばかりで、行為者当人のインテグリティのような要素を見落としてしまう。功利主義は、倫理的な思考としては単純すぎる。

批判の流れを補足しておこう。

① 功利主義は、ジムやジョージの行為について、関係者の功利を最大化することをもっぱら考える。ジョージであれば、「参加するなら功利がこれだけ出る」・「参加しないなら功利がこれだけ出る」といった形で考える。

② その時、功利主義は、ジムやジョージが積極的に行うことを検討するだけでなく、何かをしないことで起きることも同等に検討する。例えば、ジョージが参加しない時、他の研究者が軍事研究を進めてしまうが、その害もジョージの責任として計算する（Williams 1973: 95）。

[3] これは、一般に「行為功利主義（act-utilitarianism）」と呼ばれる。これは古典的な立場で、これ以外にも多様な功利主義のヴァリエーションがあるが、ここでは詳しく論じない。議論において重要なのは功利主義の精神である。

③ しかし、そのように考える時、ジョージやジムは関係者の功利を調整する存在でしかなくなっている。つまり、自分の価値観や信条のようなものを度外視して、状況を観察して、功利を最大化しようとする存在である。このような時、行為者のインテグリティが侵されてしまっている（Williams 1973: 116–7）。

これは、ややわかりにくいが、以下のような思考である。功利主義は、じぶんが何かをすること、何かをしないことで何が起きるか、すべての帰結を検討して最善の選択肢を導く。しかし、そのように考えるとき、行為者じしんはのっぺらぼうの存在になっている。じぶんの価値観や信条すらすべて客観的な計算要素として並べて考える機械のようになっている。しかし、ひとは常にこのような機械になるわけではない。むしろ、じぶんが何をするかを考えることができる。例えばジョージは、他の研究者はともかく、じぶんはそれをすることができないと考えることができる。そして、すでに明らかなように、インテグリティは、このような（他人はともかく）「じぶんが何をするか」というモーメントにおいて現れる価値である。じっさい、ジョージがそのように仕事を断るとき、そこにはインテグリティが表れており、それは価値ある選択だと考えることができる。すべての行為者を調整者・機械のように考えて倫理的な選択肢を導き出す功利主義は、このような「じぶんが何をするか」・インテグリティのモーメントの重要性を度外視してしまう。これが、ウィリアムズの「インテグリティによる異議」の骨子である。

2.3 インテグリティによる異議の眼目

ここまで要約してきたインテグリティの議論は、たんに功利主義固有の問題を超えて、倫理学の枠組みそのものを批判する射程の広い議論である。インテグリティが提起する倫理学の問題についてみておこう。それは、別個性と行為者性・主体性（agency）という、それぞれに関わり合うふたつの考慮からなる。

（1）性格の別個性 V S 不偏性

個人はそれぞれに性格・ひととなりを有しており、そして、個人の性格はそれぞれに異なっている。ジョージであれば、軍事研究への反対者という性格や価値観を持っているし、彼は自分の信条に忠実なひとなのかもしれない。たほう、異なる性格の人もいる。軍事研究への特別な反対意識のようなものを持たない人もいれば、家族のために全てを捧げる覚悟を持つ人もいる。我々が個人のなすべき行為を考えるとき、このように異なる性格を考慮に入れる必要があるのではないか。軍事研究を憎み、それを撲滅するために闘ってきたひとであれば、自分が軍事研究に参加することなど、考えるだけでも吐き気を催すかもしれない。そのような人を考える時、他の人が何をすべきかと考える時と同様に「軍事研究に参加すべきだ」と考えられるだろうか。それは、家族の生活を何よりも重視する人に対しては当てはまるかもしれないが、「軍事研究に参加することなど考えることもできない」人に対してはそれを主張することは容易ではない。このように、倫理学は、個人の性格の別個性を考慮する必要があるように思われ、インテグリティの議論はその必要性と関わっ

ている。功利主義によるインテグリティの捨象は、個人の性格という基礎的なファクターの捨象なのである。

個人の性格の捨象という問題は、功利主義だけでなく、不偏的な観点を取るあらゆる倫理学理論に当てはまるように思われる。つまり、「ひとは一般に X すべし」という形で不偏的観点から行為を考える理論は、個人の性格の別個性を捨象してしまう。例えば、功利主義と並ぶ倫理学理論であるカント主義も同様である。カント主義は、行為の格率の普遍化可能性によって、なすべき行為を考える。私がなすべき行為は、それをすることが普遍化できるような行為である。しかし、このように考える限り、性格の別個性はほとんど考慮されないことになる。結局、カント主義も不偏的観点にコミットしている。そして、ほとんどの倫理学理論は、不偏的観点にコミットする限りで、性格の別個性を適切に配慮できないのではないか。

（２）行為者性・主体性（agency）

性格の別個性と関連する論点として、行為者性（agency）がある。これはときに「主体性」とも訳される事象であり、ある状況において行為者・行為主体であるとはいかなることか、ということである。インテグリティによる異議が提起する問題は、ジョージやジムの行為者性とかかわっているように思われる。すなわち、ジョージやジムがいかに感じ、いかに考え、いかに行為するか——こういった具体的な行為者性の諸相が問われ、それをたんなる功利計算の場面へと還元しようとする功利主義の問題が明らかにされている。功利を考えれば、最善の選択はあれかもしれない。しかし、うまく説明できないにせよ、どうしてもあれは間違っているように思う。とにかく自分はこれをやる。主体は、さまざまに状況を知覚し、みずから行為する。規範倫理学は、このような行為者性の諸相を考えなければならない。ウィリアムズは、必要とされる作業として、行為者にとってみずからの行為はどのように現れるか（e.g. 行為者がみずから手をくだすこと／行為者のしたことによって誰かが殺されることの区別）、行為者にとって被害者はどれほど現実的な存在として現れているか（たんに仮想的な存在として現れているか）、行為者にとって状況がいかに切迫したもの（immediate）であるかといった種々の問いを挙げている（UFA 117–8）。例えば、ジムの事例はジョージのそれよりも、切迫しており、被害者も現実的な存在であるだろう。

じっさい、このような行為者性の諸相は、功利主義をはじめとする倫理学理論にとっても重要なはずである。というのも、倫理学理論においても、行為者がその答えをみずからの行為として実践するという、主体性の領域は確保されねばならないからである。倫理学理論は、それが答えを出せば誰もが自ずとそれに従って行為するようなプログラムではない。それは主体的に引き受けられてはじめて機能するはずである。そうだとすれば、倫理学理論も行為者性の諸相を真剣に扱うべきなのではないか。しかし、ここに至って、倫理学理論は問題に直面する。というのも、倫理学理論を主体的に引き受けるとき、主体にとってある種の疎外や混乱が生じるからである。最も典型的にこの問題を引き起こすのは功

利主義である[4]。功利主義を主体的に引き受けて功利計算を行うとき、ひとはじぶんのプロジェクトすら他者のそれと等価に扱わざるをえない。功利主義を引き受けようとした主体のそもそもの慈善的な確信すら、括弧に入れて計算する。そして、常に功利計算に従う生き方が異様とみなされる世界にあっては、功利計算それ自体を抑圧する必要が出てくる（功利計算をしていることを隠蔽したり、意識的にそれを行わないようにしたりする）。自分の確信を括弧に入れる、自分の引き受けた教義を隠蔽して二重の意識を生きる。ある種の活動家にみられるような、このような疎外、二重意識をわれわれは本当に生きることができるのだろうか。それは生きるべきものなのだろうか。

3. インテグリティによる批判のその先

3. 1 倫理学理論からの反論

インテグリティによる批判には、功利主義や倫理学理論の側から多くの反論が提示されることになった。ここではその代表的なものを紹介する。

（1）エゴイズムの疑い

まず、自分の性格・インテグリティを全体の功利よりも優先させるのはエゴイズムではないかという反論がある（Harris 1974; Davis 1980）。ジョージであれば、自分の信条を他者の功利よりも優先させておりエゴイスティックであるし、ジムの場合は、「人を殺したくない」という感情を優先させて他者を死なせるのは自己中心的すぎるように思われる。ジョージであれジムであれ、インテグリティを発揮する選択肢はエゴイスティックなので、道徳的には認められない、だから倫理学がそれらを否定するのは当然だというわけである。このようなエゴイズムの疑いから、「ウィリアムズの指摘は、功利主義が扱う道徳的な価値に対して、個人的な価値（インテグリティの価値）を対置しているに過ぎない」という批判（Brink 1986: 432–3; 安藤 2007; 180）もある。

しかし、これについてはまず、話はそう単純ではないように思われる。ジョージが軍事研究への参加を拒否するとき、彼は利己的に行為しているわけではない。彼は、自分の利益など考えていないし、軍事研究による発生しうる被害者に思いを馳せているのかもしれない。実際、我々は、ジョージがそのように参加を拒否することを倫理的に称賛することができる。ジムの場合でも、彼が一人を撃てなかったとすれば、我々は彼の弱さを責めるかもしれないが、それでも彼がエゴイスティックだと考えるわけではないだろう。いずれにせよ、ジョージやジムの葛藤を単にエゴイズムとして切り捨てることは、問題を単純化しすぎているように思われる。

そのうえで、インテグリティはたんに個人的な価値ではなく、倫理的な価値を問題にし

[4] この問題はカント主義・義務論にも当てはまる。ここにおいてウィリアムズの「ひとつ余計な思考（one thought too many）」の議論が現れる。これについては、渡辺 2024 第二章などを参照。

ている。ジョージが真摯に職を固辞するとき、われわれが行う称賛は倫理的なものである。われわれはジョージがそうした理由を理解し、それは（ジョージにとって）ただしいことであると理解することができる。これは別個性や行為者性を考慮することによる倫理の複雑さの現れであって、個人的な価値（ジョージそのひとにとっての価値）を持ち出しているわけではない。

（２）二層理論

最も有力な反論として、インテグリティと功利主義的考慮とを棲み分けさせることで、二つを両立させるというものがある。これにはいくつかの仕方があるが、代表的なものを三つ挙げておこう。

① 功利主義と直観

第一に、直観的思考と功利主義的思考を分ける、二層理論（two-level theory）がある（Railton 1984）。二層理論によれば、我々は二つのレベルで考えることができる。日常的には直観的レベルで考え、大事な時には批判的レベルで考える。例えばジョージは、ふだんは軍事研究に反対して活動し、自らのインテグリティ・性格を担保できる。とはいえ、二層理論的ジョージは、いざという時は功利主義的に考える。直観レベルではうまくいかないジレンマに陥った時や、自らの日々の行いを反省するさいに、批判的レベルで思考して、功利計算を行う。このようにして、ジョージは軍事研究に反対するインテグリティを保ちつつ、人生全体としては功利主義にコミットして生きることができる。

② 反省と実践

第二に、理論的反省と実践を分けるというタイプの棲み分けがある（Nussbaum 2000）。すなわち、功利主義やカント主義は、あくまでも反省の理論として、ある種の不偏的基準から行為の正誤の基準を提示するものに過ぎず、実際に行為者がどのように考えて行為するかについては中立の立場を取ることができる。ジョージがどのように考えて行為しようとジョージの勝手だが、彼が行った行為についてそれが正しかったかどうかを倫理学は考えるのであり、そのさいの基準が功利主義やカント主義だというわけである。これらの理論は、行為者が行為のさいにどのように考えるかについては介入しないので、行為者のインテグリティを侵さない、とされる。

③ 理論家と大衆

第三に、理論家とその他の人びとを分けるという、階級による棲み分けがある（Sidgwick 1874）。功利計算を行うのは一部の理論家だけで、その他の人々は功利計算を行う必要がない。よって、ジョージが功利計算を行う必要はない。

このようにさまざまな種類の棲み分けが考えられる。とはいえ、これらの棲み分けは本当に成功するのだろうか。この棲み分けのリアリティを考えてみると、やはり問題があるように思われる。まずは、二層理論について考えてみよう。二層理論の問題は、あるもの

がたんに何かにとって有用だから価値があると考えること（道具的価値）とあるものがそれ自体で価値があること考えることのギャップに関わる。日常的なインテグリティと批判的な功利計算が衝突するとき、常に功利計算を優先することなどできるのだろうか——むしろそこでどうしても捨てきれない価値をみとめているからこそインテグリティを示すのではないだろうか。批判的な功利計算が命じればすぐにそれを捨ててしまうようなひとは、それに対して自体的な価値をみとめていない。むしろ功利計算（道具的価値）に抵抗するからこそ、そこに自体的価値を認識していると言える。直観のレベルで真剣に価値をみとめるということは、本質的に、功利主義への抵抗を持ってしまうものなのである（Williams 1995）。

次に、反省と実践を分ける思考を考えてみよう。しかし、これにも問題があるように思われる。というのも、ウィリアムズの議論は、「生身の行為者が功利主義を引き受けると混乱する」といった議論ではなく、むしろ、「功利主義的に考えることは行為者性の諸相を捨象しており、規範倫理学として単純すぎる」というものだからだ（むろん前者の議論も成り立つが、それに尽きるわけではない）。つまり、インテグリティの議論は、反論者が言う意味での「反省」に関わっているはずだ。規範倫理学と生身の行為者の実践を分けるにせよ、規範倫理学者は行為者性や別個性を真剣に受け止めなければならない。

最後に、二層理論的な反論全般に対する疑義を示しておこう。思考のレベルを分けるのであれ、規範倫理学者と行為者を分けるのであれ、階級を分けるのであれ、二層理論は、二つの思考や階級のあいだで、ある種の秘密主義を貫徹する必要がある。例えば、直観的レベルで思考するときは、批判的レベルでの思考を完全に忘却する。あるいは、批判的レベルで思考するときには、直観的レベルでの性格を完全に忘却する。階級間であれば、理論家は、大衆に決して気づかれないように功利主義を用いて彼らを操るという秘密政治が必要になる。だが、このような二重思考や秘密主義は、可能だろうか。可能だとして、それは望ましい姿だろうか。ジョージ・オーウェルが『一九八四年』で描き出すように、二重思考と秘密政治、そのどちらも断じて忌避すべきものではないだろうか。

3. 2 インテグリティ概念の展開

最後に、インテグリティの概念について、さらなる検討を加えよう。

（1）非－自己耽溺性

インテグリティを真に発揮することは、ナルシスティックな「自己耽溺（self-indulgence）」とは異なる。つまり、インテグリティを発揮することと、自分勝手なわがまま・ナルシズムは異なる。自己耽溺とは、ある種の自己イメージに基づいてそれを殊更に主張することである。「俺はこういう人間だ」という言葉があるが、そのような自己主張は時に理にかなっておらず、自己欺瞞的であり、「自己耽溺」と呼ばれる。ジョージであれば、「俺は軍事研究に反対する人間なのだから、軍事研究に反対すべきだ」と考えるとすれば、自己耽溺に陥っているように思われる。しかし、「エゴイズムの疑い」において

論じたように、インテグリティを発揮するひとは、自己耽溺に陥る人とは異なる。すなわち、軍事研究に心から反対することは、軍事研究に反対する自己イメージに耽溺することとは異なる。そして我々は、単なる自己耽溺ではない振る舞いについて、それがインテグリティを発揮していると考える。

（2）無意識的・発見的でありうる

インテグリティは、さらに、それを持つ当人が全く気づいていないということがありうる。どんな時も子供に優しい人がいたとして、彼女は自分のことを「子供好き」だと認識していないかもしれない。自分では気づいていなくても、あるいは、自分は「子供が苦手だ」と思っていたとしても、彼女は、子供がいれば自然と笑みが溢れて優しくしてしまう。そのような彼女は、「子供好き」のインテグリティを示している。

また、インテグリティは、後の時点から遡及的に発見されるということがありうる。あるひとは、自らの人生を振り返ってみて、今まで意識したことのなかった自分の人生のインテグリティに気づくことがあるかもしれない。例えば、『人形の家』のノーラの「どうしても家を出るしかない」という確信は発見的なものだった。それまでの人生で蓄積していた違和感が、ある日を境に結実し、他者や道徳による強制に抗ってしまう。そこで行為者は「こういうことだったのか」とみずからについて発見する。

（3）創造的・即興的でありうる

インテグリティは、いかなる意味においても固定的なものではないだろう。それは、人生を通じてひとつ固着するものではない。ひとの性格が時間的変化や経験によって変化するように、インテグリティのありようも変化する。むしろ、そうした変化に直面しながら過去のじぶんの性格に固執することは、インテグリティの現れというよりも自己耽溺に近いものだろう。

関連する事象として、インテグリティの表現が変化しながら一定の共通したインテグリティが現れているケースも重要だろう。例えば、ピーター・ウィンチは、非暴力の教義に従って生きてきた老人が、少女を守るためにギャングを殺す場面を論じる（ウィンチ 1987）。非暴力のつうじょうの表現は、暴力の絶対的禁止であるとはいえ、ここでは、機械的に戒律を守ることよりも、あえてそれを破ってでも少女を救う行為の方が、非暴力を表現しているようにも思われる。

4. 文献案内

(1) 基本文献

1. Williams, B. (1973). “A Critique of Utilitarianism.” In Smart, J. J. C. & Williams, B. *Utilitarianism: For and Against*. Cambridge U. P., 75-150.

2. Williams, B. (1995). “Replies.” In Altham, J. E. J. and Harrison, R. (Eds.), World, Mind, and Ethics:

Essays on the ethical philosophy of Bernard Williams, Cambridge U. P., 185-224.

3. Crisp, R. (1997). “Integrity.” In *Routledge Philosophy Guidebook to Mill on Utilitarianism*. Routledge., 135-154.

4. Scherkoske, G. (2013a). “Whither Integrity I: Recent Faces of Integrity.” *Philosophy Compass*, 8, 28-39.

5. Scherkoske, G. (2013b). “Whither Integrity II: Integrity and Impartial Morality.” *Philosophy Compass,* 8, 40-52.

インテグリティの概念を論争的な形で倫理学に導入したのは、バーナード・ウィリアムズである。１はその初出となる基本文献で、２は後年にその議論を回顧した文章を含む。ウィリアムズの議論と、それ以降の議論状況のサーヴェイとしては３と４が簡潔でまとまっている（とりわけ４は文献情報に優れる）。ウィリアムズに対して、３は親和的な立場、４は批判的な立場から論じている。インテグリティの定義・分析については５が有益。

(2) 論争的な文献

1. Harris, J. (1974). “Williams on negative responsibility and integrity.” *Philosophical Quarterly* 24 (96): 265-273.

2. Davis, N. (1980). “Utilitarianism and Responsibility.” *Ratio*, 22 (1),15-35.

3. Cottingham, J. (1983). “Ethics and Impartiality.” *Philosophical Studies: An International Journal for Philosophy in the Analytic Tradition*, 43(1), 83-99.

4. Railton, P. (1984). “Alienation, Consequentialism, and the Demands of Morality.” *Philosophy & Public Affairs,* 13 (2), 134-171.

5. Brink, D. (1986). “Utilitarian Morality and the Personal Point of View.” *The Journal of Philosophy,* 83(8), 417-438.

6. Wolf, S. (1997). “Meaning and Morality.” *Proceedings of the Aristotelian Society*, 97, new series, 299-315.

7. Sidgwick, H. (1874/2011). *The Methods of Ethics*. Cambridge U. P.

8. Williams B. (1995). “The point of view of the universe: Sidgwick and the ambitions of ethics.” In *Making Sense of Humanity: And Other Philosophical Papers 1982–1993*. Cambridge U. P.,153–171.

ウィリアムズ以降、多くの議論がなされた。ウィリアムズへの初期の批判としては１と２があるが、１はウィリアムズの議論の解釈に問題がある。最も有力とされる二層理論からの反論については、４と５がきわめて有名。ウィリアムズを擁護するものとしては 3 と６がある。６はウィリアムズの議論と「人生の意味」を結びつけた文献として特筆に値す

る。７は功利主義の古典、本稿で扱った多くの問題が扱われている。８はそれを批判するもの、とりわけ二層理論への反論が示される。

(3) 議論の展開

1. Williams, B. (1982a). “Persons, Character, and Morality.” In *Moral Luck: Philosophical Papers 1973-1980*, Cambridge U. P., 1-19.〔ウィリアムズ, B.（江口聡訳）(2019).「人物・性格・道徳性」『道徳的な運』(伊勢田哲治監訳) 勁草書房, 第一章.〕

2. Williams, B. (1982b). “Utilitarianism and moral self-indulgence.” In *Moral Luck: Philosophical Papers 1973-1980*, Cambridge U. P., 40-53.〔ウィリアムズ, B.（江口聡訳）(2019).「功利主義と道徳的自己耽溺」『道徳的な運』第三章.〕

3. Stocker, M. (1976). “The Schizophrenia of Modern Ethical Theories.” *The Journal of Philosophy*, 73(14), pp.453-466.〔ストッカー, M.（安井絢子訳）(2015).「現代倫理学理論の統合失調症」『徳倫理学基本論文集』(加藤尚武・児玉聡編・監訳) 勁草書房, 第二章.〕

4. Wolf, S. (1982). “Moral Saints.”, *The Journal of Philosophy*, 79(8), 419-439.〔ウルフ, S.（佐々木拓訳）(2015).「道徳的聖者」『徳倫理学基本論文集』第四章.〕

5. オーウェル, G. (2009).『一九八四年』（髙橋和久訳）ハヤカワ epi 文庫.

6. Levy, D. (2020). “Simone Weil: Against being true to yourself.” In *Portraits of Integrity*, 141-9.

7. エルスター, J. (2018).「本質的に副産物である状態」『酸っぱい葡萄』勁草書房, 第二章.

8. ウィンチ, P. (1987).「道徳からみた行為者性とその行為」『倫理と行為』勁草書房, 第九章.

インテグリティの議論と関わるものとして、本稿では愛と友情の疎外の問題を指摘した。これは「一つ余計な思考（one thought too many）」の問題とも呼ばれる。溺れている二人のうち自分の妻を「彼女だから」助けるとき、「ひとは誰でも自分の妻を助けることは道徳的に正当化される」といった不偏的な考慮は必要ないし、むしろその考慮は愛を疎外する。１や３はこれを提起したもの。４は、同様の問題が、人生・生き方にあまねく行き渡ることを指摘したもの。自己耽溺の問題については２が論じている。二層理論＝二重思考の問題については、（文学作品だが）５が重要。ウィリアムズの議論も、オーウェルの問題提起を反復しているように思われる。６はヴェイユ読解を通じて、ウィリアムズ的な「個人の性格」としてのインテグリティ概念を批判するもので興味深い。７は、インテグリティの概念について、関連する論点を扱っている。すなわち、インテグリティは、本質的に副産物である状態であるように思われる。「道徳的インテグリティ」という原題である８も注目に値する文献である。

(4) 日本語の研究

1. 成田 和信 (1994).「功利主義倫理学とパーソナル・インテグリティ」三田哲学會編『哲学』第 97 号, 41-63 頁.

2. 都築 貴博 (2008).「ウィリアムズにおける全一性と道徳的行為者性」北海道大学哲学会編『哲学』第 44 号, 101-118 頁.

3. 佐藤 岳詩 (2015).「倫理学における内的視点と外的視点:「全一性に基づく反論」と間接功利主義」西日本哲学会編『西日本哲学年報』第 23 号, 91-108 頁.

4. 渡辺 一樹 (2024).「倫理は理論化できるのか——倫理学理論批判」『バーナードウィリアムズの哲学——反道徳の倫理学』青土社, 第二章.

ウィリアムズの「インテグリティ」は「全一性」とも訳され、日本でも研究がある。2 はウィリアムズを擁護する立場から、議論の背景や状況を幅広くまとめたもので、ひじょうに有益。1 は、ウィリアムズの議論の眼目を拾いつつ、二層理論の立場から批判するもので示唆に富む。3 はインテグリティの議論を「内的視点と外的視点の対立」という倫理学の主題の中に位置付けて論じている。4 は、インテグリティの議論と「ひとつ余計な思考」の議論を倫理学理論の批判として広く議論した。